



夜尿のお仕置き

わたしはあと二カ月ほどで、満四十歳になります。いわゆる不惑の年齢になるのですが、悪いがなくなるどころか、ますます悪いつづけていくようです。

えません。

では、その大きな悪いとはなにかと、あなたはおっしゃるでしょう。そう、それをこれからおはなししようと思っております。

わたしは、千葉県利根川沿いの、ある町に生まれました。うちは代々の旧家で、わたしの父は外科・内科・産婦人科の大きな病院を営んでおりました。

父は、そのうちの、外科を担当していました。青年時代をほとんどドイツでくらしていたため、晩婚で、長男のわたしがものごとろつくようになったころは、四十二、三になっ

ていたようです。五尺七寸、二十四貫という相撲のようなその巨軀は、子供のわたしには、なにかたのもしげにみえました。また、ときには、ひどく憎らしく思うこともありまして。

母はまた、その反対に、五尺にも足らぬ小柄な女で、純日本のおもながの端正な容貌をもっていました。父とは二十余りも年齢のへだたりがあったようです。

この父と母とのことについては、あとでもだんだんに申しあげますが、いずれにしてもこのふたりが、わたくしという人間の、人格形成のうえにも、また冒頭にいった、わたし

ンク歴史

一 太

浅利光一のスパの

ピシャリ！と母の手のひらがわたしの髻を打った。痛さよりも、恥ずかしさが、うずくような快さを、身内に走らせた！

雨 妙 院

しかも、そのなかでも、もっとも大きな悪いからは、おそらく生涯ぬげでることにはできないでしょう。その悪いのもとをなすものさえなければ、わたしは、たぶん、まったく正常です。ほかには、なんら病的な感情の動きがあるとは思

の大きな悪いのものであるところの病的な性的嗜好をかたちづくる——もちろん、父母自身はそんなことは気づかないのでしようが——うえにも、有力な人物だったので。さて、病院とは、十メートルほどもへだたったおなじ屋敷うちに、わたしたちの住まいがあり、わたしはそこで、ものごとろつくころから、父母とは別室に寝かされていました。

わたしの六歳のころと覚えています。ある夜、わたしは、睡眠中に尿をもらしてしまいました。

あくる朝、ふとんをかたづけにきた女中にわたしは、敷きふとんの濡れているところを指さして、

「おかあさんにいっちゃだめだよ」

そういって、朝飯をすますと、そこに遊びに出かけましたが、午すこしまえに家にもどってきてみると、縁側にわたしの夜具ふとんが干してあるのです。

——みつかったナ。

と、思いました。

コソコソと家にあがって、茶の間のひるめしの隙につくと、長火ばちの前でひとり茶をのんでいた母が、シロリとわたしのほうを